

石橋太三従軍記

石橋太三の従軍記『命寿回向録』

「入隊歩兵富山第三十五連隊 東部第四十八部隊第七十八中隊 (四六四四部隊) 春山隊

改編 第七方面軍 独立混成第二十六旅団

独立歩兵第四百六十六大隊 第一中隊第二小隊第四分隊 元予備役 陸軍伍長石橋太三」と記されている。



石橋さんは昭和十六年七月に富山三十五連隊に入隊して、一度も除隊することなく中国・南方へと転戦し昭和二年五月に金戸へ帰郷しているが、入隊した富山第三十五連隊として一貫していたわけではなかった。



石橋さんは、従軍記に「男子は右も左も兄も友も皆赤紙受けて兵隊に行くのを見て羨ましかったが三十歳を過ぎて、子供を残し妻を残し」と老年兵といわれる年になって充員招集札状(赤紙)を受領したことから書き始まる。意外なことに昭和十六年七月はまだ太平洋戦争が始まっていないので、出征には金戸部落の総出で送られていると思っていたのに、区長より「今日本は防諜時である折柄、宮参りは止めて貰いたい。それから駅で見送ることは、身内の方と雖絶対してはならない」

という厳しいお達しをうけて驚いたとある。軍部では十二月の真珠湾攻撃による会戦をすでに決定しているので、大量の充員招集を隠したと推測される。

満州出兵大演習が名目だが、実は太平洋戦争開戦の物資補給路確保のために、満州に招集し開戦と同時に南方シンガポール陥落する目的があったのだ。従軍記は日本の開戦時の連戦連勝の記録と見事に一致する。終戦間近に毒瓦斯弾を海底に放棄したと、終戦をシンガポールで迎えレンバン島で収容生活を送り、栄養失調で骨と皮だけとなり引き揚げ船に乗れないような体になりつつも、無理矢理船に乗ったこと、金戸部落の東頭軍曹(当時島島)に逢うたこと、従軍中に何度も死に目にあいながら日々念仏を称え阿弥陀様に感謝している姿が詳しく綴られている。

三十四異國にて東頭軍曹に逢う 時昭和二十一年四月十九日長崎の見たこと、一人の上着軍曹兵舎の前通って妻の龍君が駕籠をかまわられた、それは市隊でこが行かれと救えた。無其の軍曹引き返して来るのでした。龍君は手出来た。龍兵衛の白く真鍮吉より真鍮の金戸部落の石橋太三隊に居ると尋ねられた。其の上着たる私と年の頃違若(元々東頭軍曹)島外若(島外若)であった。そして名乗れ共(共)手取(手取)り合(合)った事(事)だ。

時昭和二十一年四月十九日長崎の見たこと、一人の上着軍曹兵舎の前通って妻の龍君が駕籠をかまわられた、それは市隊でこが行かれと救えた。無其の軍曹引き返して来るのでした。龍君は手出来た。龍兵衛の白く真鍮吉より真鍮の金戸部落の石橋太三隊に居ると尋ねられた。其の上着たる私と年の頃違若(元々東頭軍曹)島外若(島外若)であった。そして名乗れ共(共)手取(手取)り合(合)った事(事)だ。

# 末

広町の梅本孝一氏は、金戸の六兵衛の分家だが、その戦役は言語に絶するものだ。昭和十七年に二十一歳で徴兵検査に甲種合格し、何故か伏見の三十一師団一三八連隊に入隊させられ艱難辛苦に遭い昭和二十年五月に佐世保に帰国している。

中国中支で半年の訓練を受けて上海で三ヶ月駐留した後、南方をスマトラ・シンガポール・マレー半島・タイ・ビルマなど九ヶ国をすべて徒歩での転戦であった。何度も死にかけたが、二十二歳のとき船底に七〇〇〇人も詰め込まれた輸送船が撃沈され、六時間も味噌樽につかまり泳ぎ続けペナンに漂着したことがあった。

さらに結果的には全くの犬死で無謀な作戦であり、参加将兵約八万六千人のうち戦死者三万二千人余り、戦病者は四万人以上（一説には餓死者が多数）を出した「インパール作戦」にも参加している。その作戦は参戦した兵士が一割しか残らない地獄のような戦いであったので「俺は絶対に死なない」と思うようになり、戦友に「死にたくないければ、俺と一緒にいろ」と云っていたぐらいに不思議と死ぬ気はしなかつ

たと云う。インパール作戦を生き残りビルマでイラワジ海戦にも参戦し終戦を迎えた。それから二年ほどは捕虜生活が続き帰国したのは昭和二十年五月十八日であった。

一三八連隊には二五〇人いたが生き残ったのは十五人で富山県人では国広の西嘉山與信の二人だけであった。隣の盛田豊之助（善三郎）は大連と旅順で抑留されたが、それより遅く金戸では一番に遅い復員でもあった。

伏見三十一師団一三八連隊に所属していたが、伏見師団は近畿周辺の徴集兵であるのに、北陸の石川・富山から四二五人づつ八五〇人も編入されていた。その理由としては、近畿の男は弱いので北陸の屈強の男を編入させたと云われている。

「軍隊は運隊」と云われ何処の連隊に入隊するかは神のみぞ知るであった。梅本と同じ時に徴兵検査を受けた者に金戸では畠島俊雄・東頭外光（旧姓畠島）の三人だが、梅本孝一は伏見連隊へ配属となり、畠島兄弟は富山連隊へ入隊した。富山連隊へ入隊した畠島兄弟も兄はトラック諸島へ、弟はハノイへと分かれた。

**イ**ンパール作戦は昭和十九年三月に日本陸軍により開始された。援蒋ルート（ビルマ・インド間の要衝

にあつて連合軍から中国への主要な補給路であり、ここを攻略すれば中国軍の国民党軍を著しく弱体化できると考えられた）の遮断を戦略目的としてインド北東部の都市インパール攻略を目指した作戦である。補給線を軽視した杜撰な作戦で歴史的敗北を喫し日本陸軍瓦解の発端となったといわれている。無能かつ無責任な司令官牟田口廉也（むたぐち れんや）は、無茶な作戦の代名詞として、また大日本帝国陸軍の将官の評価の全体的なレベルの低さを示す人物として真つ先に名前が挙がる人物である。作戦失敗後何の処分もなく陸軍予科士官学校校長に就任し終戦を迎え、兵士たちへの謝罪の言葉は死ぬまで無く東京都調布市で余生を送っている。

# 作

戦失敗の責任が牟田口ただ一人の失策によるものではなく、「輜重輸卒が兵隊ならば蝶々蜻蛉も鳥のうち」の言葉に代表される、日本軍全体にはびこっていた補給軽視、機械化軽視の構造的な原因が根底にあった。

陸軍大学卒は当時の超エリートで、現代のキャリア官僚だが、机上の作戦を立てるだけで、失敗しても他へ転属して責任をうやむやにする体質は、昭和初期の軍部も今日の官僚も全く変わっていない。